
描きたい絵、書けない絵

砂漠のサソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

描きたい絵、書けない絵

【Nコード】

N2087F

【作者名】

砂漠のサソリ

【あらすじ】

わたしを救ってくれたのは一枚の絵だった。どんな幸福にも終わりが来るように、どんな不幸も必ず終わるのである。

プロローグ

目が覚めると、周囲に真っ暗な映像が広がっていた。

いや、違う。目が開かない。．．．それも違う。目は開いているんだ！

何を言っているんだ私は．．．。

すぐ近くから嗚咽おえつが聞こえて来る。

その音には、聞き覚えがある．．．ような気がする。

雪．．．かな？ 間違いない！雪だ．．．。

「ゆ・き」

私は探り探り語りかけるように妻の名前を呼んだ。

Episode 1

その日、わたしの元に掛かって来た電話はわたしを混乱させるには充分過ぎるものだった。

悪い冗談であって欲しいと願いながら、わたしはもう一度ゆっくりと確認を取る。

「すみません、もう一度お聞きしても宜しいでしょうか」

こんな事を聞いても何も変わるわけは無い・・・そんな事は分かっている。

でも、聞かずにはいられなかった。

「西村洋介さんの奥さまの雪穂さんですよね？」

旦那さまが倒れられて意識不明の重体です・・・」

電話は病院からだった。電話の女性は冷静を務めて淡々と話していく。

わたしは携帯電話を落とさないようにするのに精一杯だった。

大学病院

305号室。ナースステーションで言われたとおりの番号に辿り着いたが、中々入る決心が出来ない。

一度大きな深呼吸をした。

覚悟を決め、戸を開けた。すると、そこは個室でベッドが寂しく置かれていた。

そこにいたのは、目を閉じ横たわっているあまりに知り過ぎた人と白い髭が印象的な白衣を着たお医者さまの先生だけだった。

わたしは、少しずつベッドの方へ近づいて行った。

先生はわたしに気を使って目を合わせないようにしながら喋りかける。

「道端で急に倒れられたらしく、外傷は無いのですが・・・」

先生は話を終えたが、わたしはほとんど聞いていなかった。

ずっと、何をするわけでも無く洋介さんの顔を見ていた。

その状況を察した先生は「とりあえず、詳しい話は後で」と言って部屋を出て行った。

ずっと、雪穂は洋介の顔を見ていたが、夜中だった為、いつの間にか眠りについていた。

わたしは夢を見ていた。

夢の中にいたのは昔の私と洋介さんだった。

当時のわたしを知っている人たちは今のわたしを見れば、きっと驚いてしまっんじゃないだろうか？

わたしが洋介さんと出会う少し前、わたしはその時にやっていた仕事が上手く行かずに、日に日に会社へ行く量が減って行った。

いわゆる鬱うつという物である。

その頃には、もうほとんど部屋も出なくなっていた。

会社も自然と辞めるといふ形になり（事実上の解雇である）、家に居ても特に何をしようという気も起こらなかった。

やっていた事と言えば、今にしてみれば何故こんな事をしていたのか分からないが、いつも、インターネットで人の書いた悪口を見て楽しんだり、自殺サイトを眺めたりと・・・不幸探しをする事で

現実から逃げていたのかも知れない。

でも、どれだけの幸福あるいは不幸があっても必ず終わりはやって来るものだ。

月日が経ち、わたしは家族や友人たちの力によって、少しずつだが未来と言うものに光を見いだせられるように成って来ていた。

でも、わたしのように働くという人間としての義務を果たせていない、つまり世間から認められていないわたしを一番に支えてくれたのは・・・一枚の絵だった。

わたしは芸術が分からない、その世界とは無縁むえんの人間である。少なくとも、わたしはそう思っていた。

その日は、まだ残暑が残る初秋の頃だった。

わたしは、カーテン越しから目の前にある公園を眺めていた。

すると、一人の男性が風景をスケッチしているのが目に入った。たまたま視力の良かったわたしは、その絵がどんな絵なのかを見る事となった。見たかった、というよりは本当に偶然だった。

その絵はわたしに不思議な感覚を与えた。

その絵は、とても綺麗な絵で、素人のわたしから見ても有名な絵描きなんだろうなと思わせる程の絵だった。

そこでわたしは目を覚ました。

カーテンを開けると、太陽の光が射し込んで来た。

朝起きると、まずカーテンを開けて光を浴びるのが2人の日課で

ある。

でも、いつものように「眩しい」と言って、文句を言いながらも必ず目を覚ましてくれる洋介さんが起きて来ることは無かった。

Episode 2

昨日、洋介さんの傍で立っていた先生が病室に入って来た。

先生は、洋介さんの担当医で、名前は吉井だと名乗った。

その吉井先生が説明してくれた洋介さんの状態は、わたしを驚かせた。

先生の話によると、洋介さんはいつものように公園で絵を描いていたそうだ。偶々、公園に来ていた男の人が、その姿を見ていたらしい。

すると、急に洋介さんが椅子から転げ落ちて動かなくなったので、男の人が慌てて救急車を呼んだそうだ。

しかし、運び込まれたものの、その身体には一つも異常が無かった。

心臓も脳も正常に動き、呼吸さえ出来ている。

奇病だと先生は言った。先生が言うには、何十時間も眠り続けている状態だそうだ。

「洋介さんは、また起き上がって来るんですか？」
わたしが一番聞きたかった事である。

「・・・」

先生は何も言わなかった。

日も沈み、病院での生活も二日目の夜となった。

面会時間は過ぎていたが、先生に無理を言っただけで病院での宿泊を許可して貰った。

何か出来る事があるわけでは無かった。でも、どうしても傍にい

たかった。

そして、消灯時間になり、看護師さんに用意して貰った簡易ベッドで、わたしは、眠りに就いた。

今日も、わたしの見た夢は昨日の続きだった。

初めて、あの絵を見た次の日もその絵描きさんは公園に来ていた。わたしは、外に出る事を決心した。わたしは、どうしてもその絵をよく見たかったのだ。

わたしは、その人の近くまで行ったが、流石に声を掛ける自信までは無かったので、少し遠くから隠れるようにしながら、その絵描きさんを見た。

他の人から見れば、今のわたしはストーカーにでも映っていたかもしれない。

しかし、当時のわたしには、他人に声を掛けられる程の勇氣は無かった。

その絵描きさんは、長身で、整った顔立ちをしていて、わたしの中の画家のイメージにピッタリの青年だった。年齢はわたしと同じぐらいだと思うけど、妙に大人びた雰囲気を持っていた。

そして、その絵を初めて真近で見たわたしの中に、また昨日感じた感覚が蘇って来た。

その公園の風景を描いた絵は、前にも言ったが、とても綺麗な絵だった。

空はまるで泳いでいるかのように流れ、鳥たちは木々と戯れていた。

でも、何か違っていた。

近くで見て、やっとその理由が分かった。

何故か、その絵には生気が無く、悲しみに溢れていたのだ。

わたしには、その絵の中の物すべてが不安や恐怖を隠そう隠そうと必死になっているように感じられた。

何故、素人のわたしがこんな事を思ったのか、自分でも分からない。

ただ、その絵に魅入らされたかのように、自然とわたしは絵描きさんに話しかけていた。

Episode 3

「ご、ごめんなさい、少し良いですか」
わたしは、他人と話すのが久し振り過ぎて少しだけ声が上ずってしまった。

その絵描きさんは、いきなり話しかけられたので吃驚びっくりしたのか、不審な目をして、わたしを見ていた。

わたしは、その目に多少の恐怖があつたが、もう後戻りは出来な
いと思い、思い切つて話を続けた。

「あ、あの、わたし、近所に住んでいる春野雪穂はるのゆきほって言います。
いきなり声を掛けてごめんなさい。貴方の絵が気になってしまつて
・・・」

上手く言葉が出なくて、喋り方も凄く早口になってしまった。
絶対に変な人だと思われたに違いない。わたしは、間違いなくそ
う思った。

でも、彼の反応はそうでは無かった。

「緊張しないで、大丈夫ですよ」

彼は、顔を温和な表情に変えて、優しい喋り口調で話してくれた。

「あの・・・ありがとうございます」

「絵ですよね？こんな絵で良ければ、全然良いですよ」

「こんな・・・なんて、凄く良い絵です・・・」

わたしは、謙遜けんそんする彼に否定を入れた。

すると、彼は悲しそうな表情を一瞬だけ見せたような気がした。

「・・・本当ですか？」

彼は、一拍の間の後にそんな事を聞いてきた。

「ええ、でも・・・」

わたしは、また言わなくても良い事を言ってしまった。こんな空気の読めない性格だから、仕事や人間関係で上手くいかないんだろうな。

「その絵は、何か少し悲しんでいるような気がします・・・」
ああ、どうしよう。絶対に怒るだろうなあ。

そして、わたしは、ギョツと目を瞑った。

Episode 4

でも、怒っている雰囲気がいつまで経っても無かったので、わたしは恐る恐る目を開けた。

すると、彼は怒るところか笑顔だった。

「本音を言ってくれて嬉しいですよ。」

実は、私もそう思っていたんです。何故か、私の絵は悲しんでいるんです。でも、周りの人でそれを言ってくれる人はいませんでした。

だから、言ってくれて、凄く嬉しいです」

「えっと、あの、ありがとうございます」

わたしは、彼のまさかの反応に吃驚してしまった。

「あの、これから暇ですか？」

もし、暇なら少し話をしませんか？」

彼は、公園のベンチを指差しながら言った。

普段のわたしなら、多分断っていただろう。

でも、わたしの中に、彼ともっと話したいという感情が湧いて来た。

「はい、お願いします」

わたしは、丁寧過ぎる返事で了承していた。

それから、彼とは3時間くらい喋った。

これは、わたしにとっては凄い事だった。時間があつという間に過ぎる程、次から次へと喋りたい欲求がわたしの中に生まれて来た。わたしは彼の事をいろいろ知る事が出来たし、彼はわたしの事をいろいろ知ってくれたと思う。

彼の名前は西村洋介さん。わたしより二つ年上の26歳だそうだ。芸術大学を卒業した後、サラリーマンをしながら絵を描いていたそうだけど、画家として名前が売れて来たので、去年会社を退職したらしい。

わたしが、鬱^{うつ}で引きこもりになったと聞いても（何故、こんな事を初対面の人に話す気になったかは自分でも分からない）、嫌な顔一つしなかった。それどころか、わたしの話し方の歩調に合わせて、ゆっくりと話してくれた。

そして、日も暮れかかり別れ際となった。

こんなに時間が惜しいと感じたのは、何年ぶりだろうか。

わたしは、勇気を振り絞って洋介さんに尋ねた。

「また、会ってくれますか？」

洋介さんは、「何でそんな事を聞くんだ」というような顔をした。

「ええ、もちろん。当分、私はこの公園で絵を描いてるので、いつでも来て下さい」

Episode 5

それからのわたしは、今までから考えると不思議なほど外へ出歩くようになった。

(あくまで、公園から家まで距離だけだったが……)

間違いなく、そうなる事が出来たのは洋介さんのおかげだと思う。わたしの生活の中に新しく「洋介さんに会いに行く」という日課が加わった。

そして、家族や友人には「最近よく笑うようになったね」と言われるようになった。

そしてある日、わたしの心の中に急展開が訪れた。

わたしは、洋介さんを異性として意識し始めていることに気付き始めていた。

そんな日の事だった……。

そこで、またわたしの目が覚めた。

やはり、二日経っても洋介さんは眠ったままだった。

こんな過去の夢を続けて見るなんて……。

わたしに一抹の不安がよぎる。

見た目はいつも朝眠っている時の洋介さんと変わらないのに……。

わたしは、見ている事しか出来ない、それが歯痒かった。

この日は何もする事が無く、時間が経つのが余計に長く感じた。

こんな時、仕事でもしていれば、少しは紛れるかもしれないのに・

。。。

家には誰も居ないのでわたしには何もする事が無かった。

このまま、洋介さんを見続けているのは辛すぎる。

とりあえず、今日は一度部屋に帰ろう。

マンションに着いても、何もする事が無かった。

二人でも広過ぎた部屋は、一人だと余計広く感じてしまう。

普段の「一人」の時はそんな事を考えた事も無かったが、今は「独り」だった。

孤独感がわたしの心を埋め尽くす。

少し暗くなってきたので、少し早いが寝る事にしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2087f/>

描きたい絵、書けない絵

2010年10月28日04時42分発行